

「特集」知るワクチン“が効果的

「愛犬と飼い主の 感染症」予防学

今、多くの犬が家族の一員として迎えられ、深い愛情を受けています。

しかし、そうした中で危惧されるのが、「人獣共通感染症」です。

人獣共通感染症とはどのようなもので、どんな種類があるのか、

何が危険で、どう防げばよいのか――。

人間と犬がともに不幸な状況に陥らないために、人獣共通感染症について正しく理解し、愛犬との適切な接し方を身につけましょう。

監修…荒島康友

日本大学医学部

病態病理学系臨床検査医学分野 助教

日本大学農獣医学部獣医学科卒業。同大学附属家畜病院勤務を経て、現職。研究テーマは、人獣共通感染症・代替・相補医療の可能性。幸福論・Zoonosis協会副理事長。(社)東京都家庭動物愛護協会理事。医学博士。獣医師。



犬は人間社会で欠かせない存在になっています。



子供たちと犬について 動物の世話をすることは、相手を思いやる心を育み、精神を安定させ、集中力を高めるのに役立つ。

さらに密接になった 人間と犬との関係

犬の祖先であるオオカミは、40〜30万年も前からヒトとともに暮らすようになったと考えられています。人間社会の中でオオカミから犬へと進化し、高いコミュニケーション能力を身につけ、長い間、番犬や狩りのパートナーとして人間の役に立ってきました。

そして現代社会において、人間と犬の関係はより密接になってきています。

ペット(愛玩動物)やコンパニオン・アニマル(伴侶動物)として、文字通り犬と人間は同じ屋根の下で一緒に暮らすようになり、物理的にも心理的にもとても身近な存在となったのです。

愛犬が人間にもたらす 3つの効用

犬などの動物が身近にすることで、人間にはさまざまな効用がもたらされると考えられています。

第一は心理的・精神的なもので、ストレスが解消される、癒される、元気になる、楽しい、動物に必要とされることで自尊心や責任感が生まれる、孤独感がなくなる、といったことがあります。

第二に社会的な作用として、犬がいることでほかの人との会話や関係が生まれるということがあります。

そして第三に、生理的・身体的な作用があげられます。犬を散歩に連れていくことで自分自身の運動になる、散歩やエサやりで生活リズムが整う、ストレスが解消されて心身によい影響を与えるといったものです。



高齢者と犬について

愛犬との触れ合いは抑うつや不安などをやわらげ、意欲を高め、リハビリ効果を上げるのにも役立つ。

だから、「愛犬からの感染症」についての理解 “知るワクチン”が大切になるのです。

イヌとヒトは、 まったく別の動物

愛犬がどんなにかわいくても、犬は人間とは動物学的に異なります。そのことをよく理解したうえで愛犬と接しないと、さまざまな問題が生じかねません。

たとえば、愛犬に人間と同じ食べものを与えれば、塩分や糖分、カロリーなどの過剰摂取になったり、体に毒を及ぼす食べものを食べさせることになって、著しく健康を損ねてしまいます。

ほとんどの飼い主さんはこうした食事にに関する注意は怠らないと思いますが、忘れてならないのが「愛犬からの感染症」です。

接し方によっては愛犬から感染症がうつり、飼い主さんも愛犬も不幸な状況に陥ってしまう可能性がありますから、正しい知識「知るワクチン」を身につけておくことが大切です。

愛犬からの感染症 「人獣共通感染症」とは

感染症は、病原性の微生物(病原体)の感染によって起こる病気です。

人間や犬の体内にはいろいろな微生物が存在しており、人間と犬とは体内にいる微生物の種類は異なります。そのため、人間と犬との間で微生物が行き来すると、感染症にかかってしまうことがあるのです。

人と犬などの動物の間でうつる病気のことを、「人獣共通感染症(あるいは人畜共通感染症)」(zoonosis:ズーノシス)といいます。WHO(世界保健機構)は、「人間と脊椎動物の間を自然に行き来することができる感染症」と定義しています。なお、ズーノシスという言葉は、ギリシャ語のzoon(動物)とnosos(病気)に由来したものです。



世界の人間と動物の感染症事情について知っておこう。

日本であった事例

狂犬病
海外で犬に咬まれ感染した人が、日本に帰国して発症後、死亡。

Q熱、バズツレラ症、猫ひっかき病、カブノサイトファーガ・カニモルサス感染症、コリネバクテリウム・ウルセランス感染症
犬、猫がふつうに持っている病原体で、過度の密接な接触によって感染。

オウム病
展示施設の従業員で集団発生。

エキノコックス症
キタキツネの糞（ふん）で感染して20年後に発症。

腸管出血性大腸菌感染症
触れ合い動物施設に來場した人で集団感染。

サルモネラ症
ペットのミドリガメやイグアナ等の爬虫類（はちゅうるい）から子供が感染し、重症に。

日本紅斑熱
温暖な太平洋沿いでダニに咬まれて発症し、春と秋が発生のピークに。

結核
動物園のサルが感染し、安楽死処分に。

アジアであった事例

レプトスピラ症
洪水後、川で泳いで不明熱、感染源はネズミ由来の細菌。

鳥インフルエンザ（H5N1）
鶏での感染がアジア、ヨーロッパ、アフリカ等に拡大し、感染した鳥と濃厚に接触した人が感染し死亡。

ニバウイルス感染症
オオコウモリのウイルスが豚に感染した後に、人が豚から感染して脳炎で死亡。

狂犬病
犬に咬まれて感染発症し、死亡。

デング熱
流行地域に滞在中に蚊に刺されてウイルスに感染し発熱、まれに重篤（じゅうとく）になることもある。

チクングニア熱
流行地域で蚊に刺されることにより感染する。感染地域もアフリカ、南アジアから東南アジアへと拡大している。

腎症候性出血熱
ネズミが病原体を保有し、発熱、出血傾向、腎障害を特徴とする風土病としてユーラシア大陸各地に定着。

ヨーロッパであった事例

サルモネラ症
爬虫類（はちゅうるい）のペットから、乳児が感染して死亡。

ダニ媒介脳炎
中欧で森林散策した後に、高熱を出して死亡。

野兔病（やとびょう）
汚染地帯で、野ウサギやダニから感染して発熱。

アフリカであった事例

エボラ出血熱、マールブルグ病
サルから感染した後に、人から人へ体液で感染。

サル痘（とう）
人がサルやリス等の野生動物から感染すると、天然痘に似た症状。

クリミア・コンゴ出血熱
動物やダニから人が感染した後に、人から人へ院内感染。

ラッサ熱
西アフリカでネズミが媒介する病気。患者は毎年30万人。

中近東であった事例

ブルセラ症
ウシ等の家畜に触れたり、未殺菌乳を飲んで慢性感染。

炭疽（たんそ）
もともと病原菌は土壌に長期生存し、感染した動物から人が感染。

オーストラリアであった事例

リッサウイルス感染症、ヘンドラウイルス感染症
コウモリ由来の新たなウイルス感染症により死亡者発生。

中南米であった事例

黄熱
サルでの流行が見られる森林地帯で、感染サルを吸血した蚊に刺された人が感染。

狂犬病
吸血コウモリに咬まれて感染した人や家畜が発症して死亡。まれに、野生のサルも発症。

北アメリカであった事例

狂犬病
コウモリから感染して発症後に死亡。まれに、発症したアライグマやスカunkに咬まれて感染。

ペスト
野生リス、プレーリードッグが感染。死亡者もいる。

ウエストナイル熱
蚊が媒介するウイルス病、カラスの不明死に次いで人での発症。

ハンタウイルス肺症候群
致死率の高い呼吸器感染症、野生ネズミが感染源。

Bウイルス病
一部のアジア産サルに咬まれ、唾液に潜んでいた致死性ウイルスに感染。

サル痘（とう）
アフリカから輸入した齧歯類（げっしるい）からプレーリードッグに感染し、さらに人へ。

厚生労働省 健康局 結核感染症課発行
『動物由来感染症ハンドブック 2011』より作成

ズーノシス ペットにおける注意すべき Zoonosis(人獣共通感染症)

病名	保有動物	発生状況・症状等	伝播様式	予防
狂犬病	★ イヌ、スカunk、アライグマ、他	日本では2006年に2例発生（海外で感染）。発症するとほぼ100%死亡。	咬傷、経気道	ワクチン（ヒト、イヌ）
オウム病	トリ（セキセイインコが多い）、他	インフルエンザ様症状から多臓器障害をともなう劇症型まであり、40歳以上で劇症化傾向	経気道	正しく糞便処理をすること
Q熱	ネコ、イヌ、家畜	急性：インフルエンザ様症状、他 慢性：肝障害、不定愁訴、他	経気道、経口	正しく糞便処理をすること
猫ひっかき病	★ ネコ（イヌ）、ネコノミ	ネコによる掻・咬傷、接触によりリンパ節の疼痛性腫脹	経皮	爪切り、ネコノミの駆除
バズツレラ症	ネコ、イヌ、ウシ、ブタ、ウサギ、他	咬・掻傷による皮膚の化膿、気道感染、髄膜炎など潜在的に多くの症例が存在する	経皮、経気道	寝室に入れない、過度な接触はしない
サルモネラ症	ミドリガメ、イグアナ、イヌ、他	消化器症状（食中毒）	経口	糞便処理
ボレリア症（ライム病）	★ 野ネズミ、シカ	慢性游走性紅斑（皮膚）、関節炎	マダニ、刺傷	野山などに入る際は注意する
トキソプラズマ症	ネコ、ブタ	抗体陰性の妊婦に感染した場合、流・死産、先天性トキソプラズマ症	経口	糞便処理
皮膚真菌症	イヌ、ネコ	浅在性白癬、深在性白癬	接触	患部に触れない
幼虫移行症	イヌ、ネコ、海魚	犬・猫回虫症、アニサキス症、フィラリア症（胸部銭形陰影増）	経口、他	公園の砂場で遊んだ後、糞便処理後の手洗いなど
エキノコックス症	★ キタキツネ、イヌ、ネコ	流行地（北海道）、寄生虫性癌とも言える病態	経口	汚染の可能性のある地区では水、草など環境に注意
レプトスピラ症	イヌ、ネズミ	発熱、出血、貧血、血尿等	経皮	ワクチン（イヌ）
つつが虫病	げっ歯類など	刺し口、高熱、リンパ節腫脹	経皮	野山などに入る際は注意する
日本脳炎	ブタ、ウシ、他	突然の高熱、悪寒旋律、等	経皮	ワクチン（ブタ、ヒト）
カブノサイトファーガ感染症	★ イヌ、ネコ	2002年8月:11例中5例死亡（敗血症）	経皮	咬傷直後の抗生剤投与（発症予防：抗生剤）

★今後の発生が心配されるもの ★日本において死亡例の無いもの 出典・荒島康友

日本でも人獣共通感染症が増える可能性があります。



人獣共通感染症が 少ない国、日本

現在、地球上には800種以上の人獣共通感染症があります。そのうち、100種類以上をWHOがとくに危険だとみなしていますが、この数は年々増えています。

一方、日本国内に存在している人獣共通感染症の数は、世界のほかの地域と比べて少ないといわれています。

- その要因として、
- ①島国で陸上動物が侵入しにくい
 - ②人獣共通感染症は熱帯や亜熱帯の地域に多く、日本が位置している温帯にはもともと少ない
 - ③狂犬病対策や家畜の衛生管理などが徹底されている
 - ④国民全体の衛生観念が発達している
- などがあげられます。

今後は人獣共通感染症が 急増する可能性も

しかし、日本でも現在では人獣

腸管出血性大腸菌O-157などがあります。

現在、とくに問題になっているのが、新たに発見された感染症です。この新たに発見された感染症を新興感染症といいます。が、その多くが動物から感染する人獣共通感染症であることがわかってきました。

野生動物との接近が 感染症の増える原因に

ここに至る新しい感染症が増えてきた背景には、地球規模での社会情勢の変化があります。

輸送交通機関の発達により、人も物も簡単に国際移動することができるようになったこと、人口増加や都市化により、自然環境が大きく破壊されてきたことなどが関係し、人間と野生動物との距離が接近し、野生動物がもっていた病原体が人に感染するようになったからだというわれています。

共通感染症の危険性が高まりつつあります。その要因として、次のことがあげられます。

1. 動物側の要因

- ①野生動物をペットとして飼うようになった
- ②ペットブームによって、動物を飼育する人の数、飼育される動物の数が増えた
- ③ペットの小型化により、室内でペットを飼うようになった

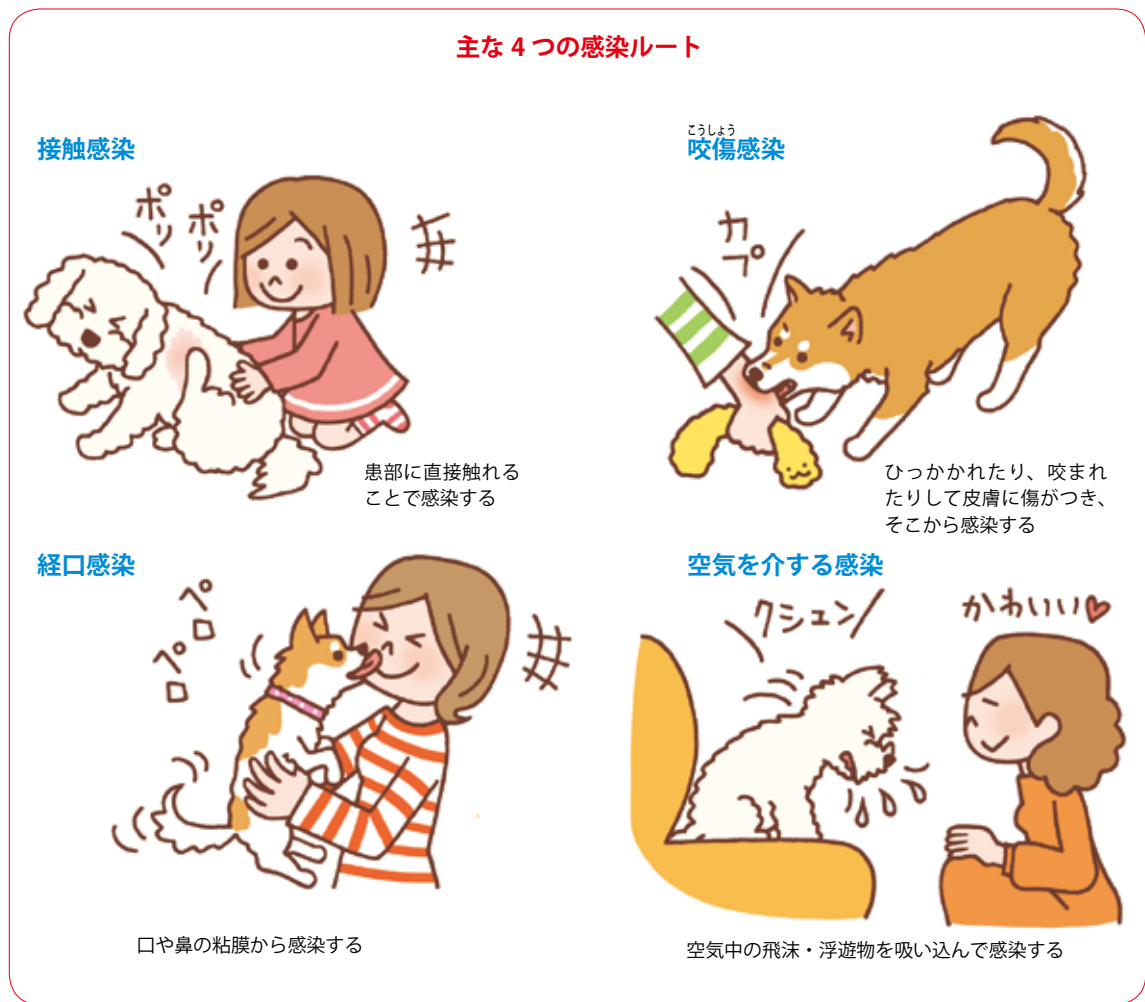
2. 人間側の要因

- ①高齢化社会になり、老化や病気で免疫力が低下している
- ②家族としてペットを飼うようになり、抱き上げたりしてペットと密接な関係をもつ人が増えた

3. 環境要因

- ①輸送交通機関の発達により、病原体が国内に侵入しやすくなった
- ②機密性の高い室内で、24時間ペットと一緒に過ごすようになった

人獣共通感染症の感染経路を知って予防する。



人獣共通感染症の主な感染ルートはこの4つ

- 人獣共通感染症の感染経路には、次のようにいくつかのルートがあります。
- ① 接触感染……病原体をもっている動物の体に触れることで病原体がヒトの体内に侵入して感染するもの
 - ② 咬傷感染（経皮感染）……病原体をもっている動物に咬まれたりひっかかれたりして感染するもの
 - ③ 経口感染……動物がもっている病原体によって水や食べものが汚染され、それを飲食することで感染するもの
 - ④ 空気を介する感染（経気道感染）……病原体をもっている動物が咳やくしゃみをして病原体が浮遊、それを吸い込んで感染するもの

人獣共通感染症の犯人の正体とは

人獣共通感染症は、動物から人へ病原体が感染するだけでなく、人から動物へ、あるいは人から人、動物

から動物へと感染して広がることもある病気です。

感染源である病原体には次のような種類があります。

- 寄生虫……多くの種類があり、犬の糞便に混ざって出てくる目に見える大きさのものあれば、臓器に潜んでいるもの、顕微鏡で見ないと見えないほど小さなものもあります。
- 細菌……寄生虫の次に種類が多く、1000分の1ミリ程度の大きさです。栄養さえあれば自分でどんどん増えます。抗生物質が効きます。
- ウイルス……細菌の10分の1から1000分の1の大きさで、人間や動物の細胞の中に入り込んで増殖します。今後も新型ウイルスが発見されて数が増えることが予想されています。

- リケッチア……細菌より小さく、ウイルスより大きい微生物で、生きた細胞の中でしか増えません。
- 真菌（カビ）……種類は多くはありますが、発生しやすいため注意が必要です。とくに免疫力の弱い高齢者や子どもが感染すると危険です。

飼い主にとって効果的な感染予防法

飼い主自身も感染症から自分の身を守るためには、「愛犬は人間とは別の動物だ」ということをしっかりと理解し、愛犬との適度な距離を保つことが必要です。

口移しで食べものを与えない、一緒に寝ない、一緒にお風呂に入らない、動物に触れたら必ず手を洗うがいをする、食べもののある場所へは連れていかない、愛犬に飼い主の体をなめさせないのが基本原則です。

とくに高齢者や子ども、持病があるなど、免疫力の低下した方は、感染症にかかり重症化する可能性がありますから、十分に注意しなければなりません。

環境を整えて感染リスクを減らす

飼育環境を清潔に保つことが第一です。食事や水を置きっぱなしにしない、すぐに糞尿の始末をする、室内はこまめに掃除する、寝室やキッチンなどに犬が入れないようにするといったことを日々徹底しましょう。

感染を予防するのは、日常習慣からです。

日常生活の注意で感染は予防できる

感染症は、①感染源、②感染経路、③感受性集団の3つが揃って初めて感染します。

愛犬から人間への感染は、①愛犬が何らかの感染症にかかっている、または問題となる微生物を持っている、②接触や咬傷（経皮）、経口、経気道などの感染経路がある、③飼い主が感染症にかかりやすい状況にある、という3つの条件が必要になる

ということですが、つまり、これらの条件のうち、どれか一つでもなくすことができれば、愛犬からの感染を予防できるので、決して不可能なことではないのです。

ワクチンや定期健診で、愛犬を感染症から守る

愛犬への対策として、まずは狂犬病予防ワクチンを必ず接種します。また、義務ではありませんが、犬用混合ワクチンの中にはレプトスピラ

人獣共通感染症予防のための15カ条

- ① ペットからうつる病気についての正しい知識を身につける（知るワクチン）
- ② 人の健康を保つ（免疫力を保つ。持病のある人は日和見感染症（※）になりやすいので注意が必要）
- ③ 手洗い、うがいの励行
- ④ ペットとのつきあいにけじめをつける
 - 1.) 寝室に入れない（一緒に寝ない）
 - 2.) 口移しはしない
 - 3.) 食品のあるところへは連れていかない
- ⑤ 性格が温厚なペットを選ぶ
- ⑥ 獣医師に相談して飼育ペットの習性を知る
- ⑦ ペットに定期検診を受けさせ、健康を保持する
- ⑧ ペットにワクチンを接種する
- ⑨ 家ネコの爪は常に切っておく
- ⑩ 感染源の除去
 - 1.) 糞便の始末
 - 2.) 原因となる微生物（病原体）の治療、駆除
- ⑪ 飼育環境を清潔に保つ
- ⑫ 殺菌能のある空気清浄機を使用する
- ⑬ 野生動物には、触れない、飼わない
- ⑭ 飼育開始後は最後まで飼育を行う（野生化、野良化の防止）
- ⑮ 「ペットはヒトではない!」としっかりと認識する

感染症から愛犬を守る予防策



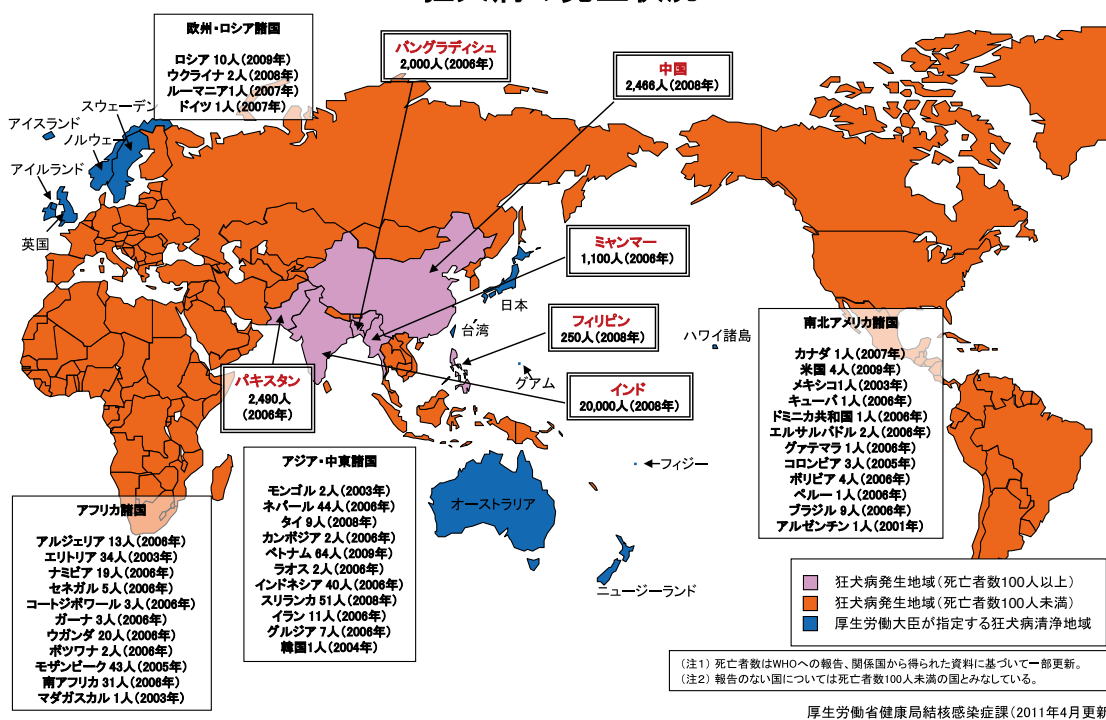
人と犬との主な人獣共通感染症

予防接種を法律で定められている

狂犬病

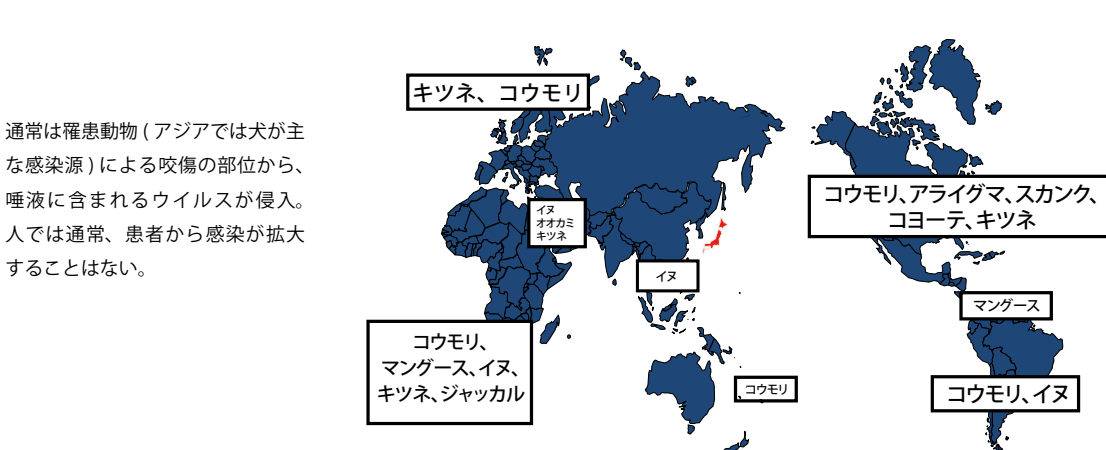
- **感染経路** 咬傷、経気道
- **犬の主な症状** 興奮、凶暴、沈うつ、マヒ。発症するとほぼ100%死亡
- **人の主な症状** 犬と同じ
- **特徴** 日本国内では1957年以降発生していないが、海外では年間3～5万人が狂犬病で死亡。海外で感染し、帰国後に発症して亡くなった人もおり、いつ日本に入ってきたもおおしくない状況にある。
- **予防と治療** 愛犬には狂犬病ワクチンを必ず接種させること。人が狂犬病の流行している国へ旅行するときは、前もってワクチン接種を受けること。症状が出る前なら**暴露後免疫**(※)で助かる可能性があるが、症状が出てからでは治療法がない。

狂犬病の発生状況



日本、英国、スカンジナビア半島の国々など一部の地域を除いて、全世界に分布している。

世界各地の狂犬病媒介動物



不登校、うつ病と診断されていることもある

Q熱

(コクシエラ症)

- **感染経路** 経口、経気道
- **犬の主な症状** 無症状、死産、流産
- **人の主な症状** 急性ではインフルエンザのような症状、慢性では肝障害や不定愁訴
- **特徴** 哺乳動物の多くがこの病原体をもっていると考えられている。糞尿などから感染。人間のQ熱は世界各国で増加傾向にあるが、現状では診断がしにくく、自律神経失調症やうつ病などと診断されている可能性もある。
- **予防と治療** 愛犬との過度な接触を避け、手洗いやうがいをよくすること。ペット動物を飼育している人が、インフルエンザの治療を受けていても症状が続く場合は、Q熱を疑うことが必要。抗生物質で治療できる。

パストレラ症

高齢者や幼児はとくに注意が必要

- **感染経路** 経気道、咬傷など
- **犬の主な症状** 無症状
- **人の主な症状** 呼吸器症状、咬傷感染の場合は局所の疼痛や発赤など
- **特徴** パストレラ菌は多くの哺乳動物の口中

急激に悪化する非常に危険な病気

カプノサイト

ファーマガ感染症

- **感染経路** 咬傷
- **犬の主な症状** 無症状
- **人の主な症状** 発熱、倦怠感、腹痛、吐き気、頭痛、敗血症、髄膜炎
- **特徴** 多くの犬や猫の口中にいる細菌が感染。発症はまれだが、免疫力が低下していると急激に重症化して死亡することもある。
- **予防と治療** 愛犬との過度な接触を避け、遊んだ後は必ず手洗いなどを行うこと。咬まないうちからすぐに病院を受診し、犬に咬まれたことを医師に伝えて、早急に治療を受けること。

愛犬にワクチンを受けさせて予防を

レプトスピラ症

- **感染経路** 経口、接触
- **犬の主な症状** 発熱、元気消失、食欲不振、出血、黄疸、死亡
- **人の主な症状** 黄疸、出血、タンパク尿、血尿、発熱
- **特徴** 病原体は細菌で、ドブネズミの尿が感染源。身近に存在しているため、予防することが大切。
- **予防と治療** 愛犬にはワクチンを接種して予防すること。感染した場合は抗生物質で治療。

犬から感染することもある

猫ひっかき病

- **感染経路** 咬傷、接触
- **犬の主な症状** 無症状
- **人の主な症状** リンパ節の痛みを伴う腫れ、倦怠感、発熱
- **特徴** 子猫からひっかかれたり咬まれたりして感染することが多いが、ノミや犬などから感染することもある。
- **予防と治療** ノミを駆除すること。症状が続く場合は猫ひっかき病感染の検査を。治療には抗生物質を使用。

・文中の愛犬との過度な接触とは、キス、寝室に入れる、箸・スプーンを共用するなどのこと。

人と犬との主な人獣共通感染症

犬もサルモネラ菌をもっている

サルモネラ症

(食中毒)

●感染経路 経口

●犬の主な症状 無症状

●人の主な症状 腹痛、下痢、発熱、嘔吐

●特徴 さまざまなペットがサルモネラ菌をもっている、糞尿の中に入ると食中毒を起こす。高年齢者や乳幼児は重症化しやすい。

●予防と治療 愛犬との過剰な接触を避け、糞尿の始末をしっかりと行うこと。また、愛犬と遊んだ後は手洗いやうがい忘れないうこと。重症の場合は治療に抗菌剤が使用される。

本州での拡大が心配される

エキノコックス症

(多包虫症)

●感染経路 経口

●犬の主な症状 下痢、無症状

●人の主な症状 5～10年間の無症状の潜伏期の後、腹痛、黄疸、肝不全

●特徴 病原体は寄生虫の仲間。糞便中にあつる虫卵が人間の腸管内に入り、内臓や脳などに寄生して増殖、袋を形成し、腫瘍のように異物化する。北海道以外にはないといわれていたが、本州でも見つかったおり、拡大が心配されている。

●予防と治療 北海道では生水を飲まないこと。治療薬はなく、外科手術で虫を取り除く。

失明や脳炎の危険性もある

回虫症

(幼虫移行症)

●感染経路 経口

●犬の主な症状 無症状、下痢、嘔吐

●人の主な症状 発熱、視力低下、脳炎、下痢、腹痛

●特徴 ほとんどの子犬は感染している。人に感染すると、虫卵が腸の中で孵化して全身を移動。侵入した場所によっては失明したり、脳炎を起こしたりすることもある。

●予防と治療 定期的に愛犬の検便を行い、獣医師の処方した駆虫を実施すること。愛犬との過剰なスキンシップを避け、遊んだ後は手を洗うこと。子供では注意が必要。

愛犬の皮膚病が人にも感染

皮膚糸状菌症

(皮膚真菌症)

●感染経路 接触

●犬の主な症状 皮膚の異常(発赤、腫れ、フケ、脱毛など)、爪の異常(変色、脱落など)

●人の主な症状 白癬、脱毛、発疹

●特徴 皮膚糸状菌は白癬と呼ばれる真菌の仲間、犬などの動物を好む。人に感染すると、犬とよく接触する頭や顔、手足などに症状が多くあらわれる。

●予防と治療 愛犬の皮膚の状態をよく観察し、異常を見つけたらすぐに獣医師に診てもらふこと。皮膚に異常がある犬や猫との接触に注意し、触れたら手を洗う。治療は、抗真菌剤の内服薬や外用薬を用いる。

質問箱

人獣共通感染症の、ここが知りたい！

Q 日本では長い間狂犬病は発生していないようですが、それでも犬に狂犬病の予防注射を受けさせる必要があるのでしょうか。

A かつて日本でも発生していた狂犬病がなくなったのは、飼い犬に狂犬病ワクチンの接種を「狂犬病予防法」により義務付けたからです。

現在はワクチン接種を受けていない犬が増えて問題となっていますが、犬以外のほかの動物検疫が義務付けされていない輸入ペットや外国船の入る港などから狂犬病菌を保有する動物が侵入してくる可能性もあり、万が一国内で発生

するとあつという間に拡大するおそれがあります。愛犬と家族を守るためにも、必ずワクチン接種を受けさせましょう。

※狂犬病ワクチン接種を受けないと行政に罰せられます。

Q ペットから感染した病気は、人から人へも感染するのでしょうか。

A 病気によってその可能性はあります。例えばQ熱などは、輸血や性交渉で感染したという報告もあります。

現在、医療機関でも感染の有無を検査で調べることが難しいいうえ、人獣共通感染症の研究者が少ないため、まだ実情は解明されていないのです。

Q 人獣共通感染症を疑って病院を受診する場合、どんな点に注意すればよいでしょうか。

A 病院を受診する場合は、どのような症状であつてもペットの有無を医師に伝えるほうがよいでしょう。

ただし、人獣共通感染症に詳しい医師や獣医師は少なく、また検査体制もまだ十分ではないため、きちんと診断されない可能性もありますので、治療を受けても症状が改善されない場合は、Zoonosis協会(※)など、人獣共通感染症に詳しい団体や医師に相談してみましよう。

Q 病院を受診したところ、愛犬を手放すように言われました。何とか手放さないですむ方法はないでしょうか。

A 病気の種類などによって対応が異なります。基本的には寝室やキッチンには愛犬を入れない、愛犬に触つたら必ず手洗いやうがいをする、空気清浄機などを活用して室内を清潔に保つなどの飼育環境を衛生的にする工夫をすることで、状況はかなり変えられると思います。

※Zoonosis協会 <http://zoonosis.jp/>